形容詞分類の一試案

——派生語形成の可否による——

相　原　林　司

（はじめに）

彼一語我一語秋深みかも　高浜虚子

ポツリ、ポツリ……話が途切れがちでどうもはずんでこない。せっかく久しぶりの再会なのに……。何かお互いに遠慮があるのか、こだわりがあるのか、または思い屈するものがあるのか……。その話の隙間に晩秋の重さのようなものがしのび込んでくる、というのであろう。末五に、「深さかな」でも「深きかな」でもなく、「深みかも」が選ばれたのは、その微妙な感じを生かすための配慮と思われる。同じく虚子の句でも、「流れゆく大根の葉のはやさかな」のように、対象が明視的に捉えられている場合とそこが違うのである。

しかし、「深み」には、そのような不可視的な、微妙な「深い感じ」を表すほかに、「深みにはまる」のように、〈所・場〉の意味に用いることがある。また、これを他の形容詞について見ると、「高み」のように、〈所・場〉の意味だけを表すものもあり、「柔らかみ」のように、感覚的なものだけに用いられるものもある。「弱み」などは、〈弱い点・弱い個所〉の意味であるが、明視的なものではない。あるいは、「深み」はあるが、「浅み」はない。「重み」はあっても、「軽み」は現代語としては用いられない。そのように、「——み」の形を形成する形容詞と形成しない形容詞があるが、両者はその表現性、表現力に何か差があるのか。また、「——み」の形を形成する形容詞はどのくらいあるのか。他の派生形、たとえば「——げ」「——める」のようなものとのかかわりはどうなのか。あれこれ考えているうちに、一度、現代語の形容詞全般について、その派生語形成の可否、そしてそれと形容詞の機能とのかかわりを検討してみたい、と思い付いた。

形容詞の派生形とその表現機能との関係については、いくつかの先行研究が

ある。例えば、森岡健二氏は、形容詞系の形態素のうち、末尾に「し」を伴わないものをさらに(1)「丸―」「高―」など、「――める」「――まる」の接辞を要求するものと、(1′)「寒―」「辛(つら)―」など、接辞「――がる」「――げ」を要求するものとに分け、(1)に属する形式は事物の客観的情態や性質を表し、(1′)に属する形式は言語主体の感じる主観的な感覚や感情を表すものであることを指摘している。注(1)

また、小山敦子氏は、日本語の形容詞を、一般属性を表すものと、話者の感情内容を表すものとに二分し、前者には「――がる」がつかないが、後者には「――がる」がついて動詞化することを明らかにしている。注(2) さらに、古語の「――み」の形については、林四郎氏が「<～み>考」において詳細に考察している。注(3)

しかし、現代語の形容詞について、その派生形全般をとりあげて調べたものは、まだなさそうである。そこで、派生語形成の可否によって現代語の形容詞を分類し、その可否がそれぞれの形容詞の意味用法上の特性とどうかかわるのか、その辺を少しでも解明してみたい、というのが本稿の趣旨である。

まず、形容詞をA～Ｉの９類に分けた。それは、体言性の派生形（「――み」「――さ」「――げ」「――め」)の形成が可能か否かによるものである。その上で、A～Ｉのそれぞれについて１～４の下位分類を立てた。用言性の派生形「――がる」「――まる」などの形成が可能か否かがその分類の基準となっている。

形容詞基本形の選出は、主として『新明解国語辞典』〈第２版〉による。ただし、明らかに方言、俗語、幼児語と思われるものは、これを考察の対象から除いた。「ちっちゃい」「なまっちょろい」の類である。また、それぞれの基本形を、国立国語研究所編の『分類語彙表』と照合し、同表における所属を分類番号をもって示した。以下の表で、各基本形の後に(　　)で入れた数字がそれである。

(派生語形成による分類)

A類：体言性の派生語「――さ」「――み」「――げ」「――め」をすべて形成するもの。

A―1　用言性の「――まる」(または「――む」)「――める」「――がる」を形成するもの

強い（3・14）→強さ、強み、強げ、強め、強まる、強める、強がる

A－2　用言性の派生語のうち、「――まる」（「――む」）「――める」のみを形成するもの。

深い（3・1920）→深さ、深み、深げ、深め、深まる、深める

ゆるい（3・182）→ゆるさ、ゆるみ、ゆるげ、ゆるめ、ゆるむ、ゆるめる

弱い（3・14：3・584）→弱さ、弱み、弱げ、弱め、弱まる、弱める

A－3　用言性の派生語のうち、「――がる」のみを形成するもの。

重い（3・193）→重さ、重み、重げ、重め、重がる

A－4　用言性の派生語を形成しないもの。

甘い（3・505）→甘さ、甘み、甘げ、甘め

からい（3・505）→からさ、からみ、からげ、からめ

軽い（3・193）→軽さ、軽み*、軽げ、軽め

やわらかい（3・506）→やわらかさ、やわらかみ、やわらかげ、やわらかめ

浅い（3・1920）→浅さ、浅み、浅げ、浅め、

B類：体言性の派生語「――さ」「――み」「――げ」を形成するもの。

B－1　用言性の派生語「――まる」（「――む」）「――める」「――がる」を形成するもの。

痛い（3・300）→痛さ、痛み、痛げ、痛む、痛める、痛がる

悲しい（3・3011）→悲しさ、悲しみ、悲しげ、悲しむ、悲しがる

楽しい（3・3010）→楽しさ、楽しみ、楽しげ、楽しむ、楽しがる

ぬくい（3・515）→ぬくさ、ぬくみ、ぬくげ、ぬくまる、ぬくめる、ぬくがる

懐しい（3・302）→懐しさ、懐しみ、懐しげ、懐しむ、懐しがる

いぶかしい（3・306）→いぶかしさ、いぶかしみ、いぶかしげ、いぶかしむ、いぶかしがる

B－2　用言性の派生語のうち、「――む」「――める」のみを形成するもの。

親しい（3・302）→親しさ、親しみ、親しげ、親しむ

すごい（3・14）→すごさ、すごみ、すごげ、すごむ

B－3　用言性の派生語のうち、「――がる」のみを形成するもの。

ありがたい（3・3012）→ありがたさ、ありがたみ、ありがたげ、ありがたがる

美味(うま)い（3・505）→美味さ、美味み、美味げ、美味がる
おかしい（3・3010：3・306）→おかしさ、おかしみ、おかしげ、おかしがる
おもしろい（3・3010）→おもしろさ、おもしろみ、おもしろげ、おもしろがる
かゆい（3・300）→かゆさ、かゆみ、かゆげ、かゆがる
くさい（3・504）→くささ、くさみ、くさげ、くさがる
寂しい（3・3011）→寂しさ、寂しみ、寂しげ、寂しがる
渋い（3・505）→渋さ、渋み、渋げ、渋がる（渋る）
新しい（3・166）→新しさ、新しみ、新しげ、新しがる
にがい（3・505）→にがさ、にがみ、にがげ、にががる
ゆかしい（3・302）→ゆかしさ、ゆかしみ、ゆかしげ、ゆかしがる

B－4　用言性の派生語を形成しないもの。

暖かい（3・515）→暖かさ、暖かみ、暖かげ
さかしい(――)→さかしさ、さかしみ、さかしげ
優しい（3・345）→優しさ、優しみ、優しげ

以上のうち、A類の語は、「甘い」「からい」「やわらかい」の3語が、『分類語彙表』（以下「語彙表」と略記）の3・5（自然現象）の項に含まれ、その他が3・1（抽象的関係）の項に含まれている。これに対して、B類の語は、「すごい」「新しい」の2語を除いて、他は、3・5か3・3（精神・行為）の項に含まれる。特に、3・3に属するものが多い。

なお、＊印を付けたのは、その使用範囲や使用法、使用形態などが限定されていることを示す。例えば、「軽み」は、俳諧関係で使われる一種の専門語である。（以下同様）

C類：体言性の派生語のうち「――さ」「――み」「――め」を形成するもの。

C－1　用言性の派生語「――まる」「――める」「――がる」を形成するもの。

（該当する語例は見いだされない）

C－2　用言性の派生語として「――まる」（「――む」）「――める」のみ形成するもの。

明るい（3・501）→明るさ、明るみ、明るめ、明るむ
高い（3・1920）→高さ、高み、高め、高まる、高める

細い（3・1921）→細さ、細み、細め、細める

C－3　用言性の派生語のうち、「――がる」のみを形成するもの。

（該当する語例は見いだされない）

C－4　用言性の派生語を形成しないもの。

厚い（3・1921：3・368）→厚さ、厚み、厚め

D類：体言性の派生語「――さ」「――げ」「――め」を形成するもの。

D－1　用言性の派生語「――まる」「――める」「――がる」を形成するもの。

（該当する語例は見いだされない）

D－2　用言性の派生語のうち、「――まる」「――める」だけを形成するもの。

堅(固)い（3・506）→堅さ、堅げ、堅め、堅まる、堅める

狭い（3・1920）→狭さ、狭げ、狭め、狭まる*、狭める*

早い（3・1660）→早さ、早げ、早め、早まる、早める

速い（3・194）→速さ、速げ、速め、速まる、速める

広い（3・1920）→広さ、広げ、広め、広まる、広める

D－3　用言性の派生語の「――がる」のみ形成するもの。

少ない（3・195）→少なさ、少なげ、少なめ、少ながる

D－4　用言性の派生語を形成しないもの。

安い（3・195：3・37）→安さ、安げ、安め

以上、C類、D類を通して見ると、これらに属する語の少数であることが目立つ。また、「語彙表」との照合の結果は、3・5に含まれる「堅い」を除いて、他はすべて、3・1の抽象的関係に含まれる語である点が注意をひく。これを例えばB類と比較すると、その差は「――め」の形を形成するかしないかにあるが、3・3の精神・行為に関する語の多いB類とは結果的に顕著な対照が見られる。

E類：体言性の派生語として「――さ」「――み」のみ形成するもの。

E－1　用言性の派生語「――まる」（「――む」）「――める」「――がる」を形成するもの。

（該当する語例は見いだされない）

E－2　用言性の派生語「――まる」（「――む」）「――める」を形成する

もの。

青い（3・502）→青さ、青み、青む

赤い（3・502）→赤さ、赤み、赤らむ*

黒い（3・502）→黒さ、黒み、黒ずむ*

白い（3・502）→白さ、白み、白む*

丸い（3・182）→丸さ、丸み、丸まる、丸める

E－3　用言性派生語として「――がる」のみを形成するもの。

（該当する語例は見いだされない）

E－4　用言性の派生語を形成しないもの。

（該当する語例は見いだされない）

F類：体言性派生語「――さ」「――げ」のみを形成するもの。

F－1　用言性派生語に「――まる」（「――む」）「――める」「――がる」を形成するもの。

怪しい（3・306）→怪しさ、怪しげ、怪しむ、怪しがる

尊い（3・330：3・37）→尊さ、尊げ、尊む（尊ぶ）、尊がる

憎い（3・302）→憎さ、憎げ、憎む、憎がる

恥かしい（3・3012）→恥かしさ、恥かしげ、恥かしめる、恥かしがる

いとしい（3・302）→いとしさ、いとしげ、いとしむ、いとしがる

危うい（3・134）→危うさ、危うげ、危ぶむ*、危うがる

惜しい（3・3012）→惜しさ、惜しげ、惜しむ、惜しがる

F－2　用言性の派生語「――む」「――める」のみを形成するもの。

いやしい（3・330）→いやしさ、いやしげ、いやしむ、いやしめる

清い（3・506）→清さ、清げ、清める（清む）

F－3　用言性の派生語「――がる」のみを形成するもの。

暑い（3・515）→暑さ、暑げ、暑がる

勇ましい（3・345）→勇ましさ、勇ましげ、勇ましがる*

忙しい（3・332）→忙しさ、忙しげ、忙しがる

いまわしい（3・302）→いまわしさ、いまわしげ、いまわしがる

美しい（3・502）→美しさ、美しげ、美しがる

うっとうしい（3・3011：3・515）→うっとうしさ、うっとうしげ、うっとうしがる

うらやましい（3・302）→うらやましさ、うらやましげ、うらやましがる

うるさい（3・31：3・503）→うるさ<u>さ</u>、うるさ<u>げ</u>、うるさ<u>がる</u>
うれしい（3・3010）→うれし<u>さ</u>、うれし<u>げ</u>、うれし<u>がる</u>
恐ろしい（3・3011）→恐ろし<u>さ</u>、恐ろし<u>げ</u>、恐ろし<u>がる</u>
おぼつかない（3・3012）→おぼつかな<u>さ</u>、おぼつかな<u>げ</u>、おぼつかな<u>がる</u>
かわいい（3・302）→かわい<u>さ</u>、かわい<u>げ</u>、かわい<u>がる</u>
汚ない（3・506）→汚な<u>さ</u>、汚な<u>げ</u>、汚な<u>がる</u>
悔しい（3・3012）→悔し<u>さ</u>、悔し<u>げ</u>、悔し<u>がる</u>
恋しい（3・302）→恋し<u>さ</u>、恋し<u>げ</u>、恋し<u>がる</u>
寒い（3・515）→寒<u>さ</u>、寒<u>げ</u>、寒<u>がる</u>
つらい（3・3011）→つら<u>さ</u>、つら<u>げ</u>、つら<u>がる</u>
眠たい（3・300）→眠た<u>さ</u>、眠た<u>げ</u>、眠た<u>がる</u>
歯がゆい（3・3012）→歯がゆ<u>さ</u>、歯がゆ<u>げ</u>、歯がゆ<u>がる</u>
むずがゆい（3・300）→むずがゆ<u>さ</u>、むずがゆ<u>げ</u>、むずがゆ<u>がる</u>
珍らしい（3・120）→珍らし<u>さ</u>、珍らし<u>げ</u>、珍らし<u>がる</u>
〜〜〜〜〜その他〜〜〜〜〜

F－4　用言性の派生語を形成しないもの。
あどけない（3・304：3・342）→あどけな<u>さ</u>、あどけな<u>げ</u>
荒々しい（3・345）→荒々し<u>さ</u>、荒々し<u>げ</u>
あわただしい（3・194）→あわただし<u>さ</u>、あわただし<u>げ</u>
いかめしい（3・335）→いかめし<u>さ</u>、いかめし<u>げ</u>
疑わしい（3・306）→疑わし<u>さ</u>、疑わし<u>げ</u>
幼い（3・1660）→幼<u>さ</u>、幼<u>げ</u>
おとなしい（3・345）→おとなし<u>さ</u>、おとなし<u>げ</u>
輝かしい（3・330）→輝かし<u>さ</u>、輝かし<u>げ</u>
かわいらしい（3・302）→かわいらし<u>さ</u>、かわいらし<u>げ</u>
聞きぐるしい（3・302）→聞きぐるし<u>さ</u>、聞きぐるし<u>げ</u>
けわしい（3・182）→けわし<u>さ</u>、けわし<u>げ</u>
騒がしい（3・503）→騒がし<u>さ</u>、騒がし<u>げ</u>
たくましい（3・584）→たくまし<u>さ</u>、たくまし<u>げ</u>
なさけ深い（3・368）→なさけ深<u>さ</u>、なさけ深<u>げ</u>
鈍い（3・182）→鈍<u>さ</u>、鈍<u>げ</u>
はかない（3・120）→はかな<u>さ</u>、はかな<u>げ</u>
古い（3・1661）→古<u>さ</u>、古<u>げ</u>

誇らしい（3・3012）→誇らしさ、誇らしげ
貧しい（3・37）→貧しさ、貧しげ
みすぼらしい（3・330）→みすぼらしさ、みすぼらしげ
むさくるしい（3・506）→むさくるしさ、むさくるしげ
むつまじい（3・302）→むつまじさ、むつまじげ
ゆゆしい（3・132）→ゆゆしさ、ゆゆしげ
りりしい（3・345）→りりしさ、りりしげ
若々しい（3・1660：3・581）→若々しさ、若々しげ
〜〜〜〜その他〜〜〜〜

以上、E類、F類を通じて見ると、この両類がかなり対照的な特徴を示すことに気づく。第一に、E類に属する語は少数なのに、F類に属する語は非常に多い。殊に、F－3、F－4の項に属する語は、ここに採録した他にもその数が多く、F－3には約80語、F－4には200語あまりが数えられる。これは、現代語形容詞の大部分を占める数である。

E類に属するのは、E－2型のみであるが、「丸い」を除いて他は、「語彙表」の3・5（自然現象）に含まれている。中でも、黒・白・赤・青という、日本語の四原色といわれる色彩語がすべて含まれるのが注目される。なお、これらの語の中には、用言性の派生語が、「赤らむ」「黒ずむ」「しらむ」のように、音声面の変化を伴うものがある。しかし、表現機能や用法などの点では他の形容詞の場合と同じと考えられるのでこの項に収めた。

F－3とF－4の違いは、「――がる」の形を形成するか否かであるが、それを「語彙表」の分類と照合すると、「――がる」を形成するF－3のほうには、3・3（精神・行為）の項に含まれるものが多く、ここに採録した語についても、全体の約70％を占める。「――がる」を形成しないF－4についても、その半数は3・3に含まれるが、3・1（抽象的関係）や3・5（自然現象）の項に含まれるものもほぼ同数ほどある。この差はやはり、感情形容詞と属性形容詞の差であろうか。ただし、それは、「語彙表」の3・3の項に含まれるものがそのまま感情形容詞だということではない。ただ3・1や3・5の項よりも、3・3の項に感情形容詞が多く含まれているということである。

G類：体言性の派生語として「――さ」「――め」のみ形成するもの。

G－1　用言性の派生語として「――まる」「――める」「――がる」を形成するもの。

（これに該当する語例は見いだされない）

G－2　用言性の派生語「――まる」（「――む」）「――める」のみ形成するもの。

薄い（3・1921）→薄さ、薄め、薄まる、薄める

低い（3・1920）→低さ、低め、低まる、低める

ぬるい（3・515）→ぬるさ、ぬるめ、ぬるむ、ぬるめる

G－3　用言性の派生語として「――がる」のみ形成するもの。

熱い（3・515）→熱さ、熱め、熱がる

G－4　用言性の派生語を形成しないもの。

粗い（3・182）→粗さ、粗め

大きい（3・1921）→大きさ、大きめ

多い（3・195）→多さ、多め

遅い（3・194）→遅さ、遅め

細かい（3・1921）→細かさ、細かめ

短い（3・1920）→短さ、短め

小さい（3・1921）→小ささ、小さめ

近い（3・1920）→近さ、近め

遠い（3・1920）→遠さ、遠め

長い（3・1920）→長さ、長め

太い（3・1921）→太さ、太め

H類　体言性の派生語として「――さ」のみを形成するもの。

H－1　用言性の派生語として「――まる」「――める」「――がる」を形成するもの。

（これに該当する語例は見いだされない）

H－2　用言性の派生語として「――まる」「――める」のみ形成するもの。

（これに該当する語例も見いだされない）

H－3　用言性の派生語として「――がる」（「――げる」）のみを形成するもの。

荒い（3・182）→荒さ、荒げる

けむい（3・300）→けむさ、けむがる*

水臭い（3・368）→水臭さ、水臭がる*

めでたい（3・335）→めでたさ、めでたがる

H－4　用言性の派生語を形成しないもの。
篤い（3・584）→篤さ
危気ない（――）→危気なさ
甘ったるい（3・505）→甘ったるさ
荒っぽい（3・14）→荒っぽさ
淡い（3・501）→淡さ
いさぎよい（3・341）→いさぎよさ
うす暗い（3・501）→うす暗さ
うず高い（3・183）→うず高さ
えがらっぽい（3・505）→えがらっぽさ
おびただしい（3・195）→おびただしさ
かぐわしい（3・504）→かぐわしさ
かしがましい（―――）→かしがましさ
かんばしい（3・504）→かんばしさ
きわどい（3・132）→きわどさ
しつこい（3・347：3・505）→しつこさ
湿っぽい（3・513）→湿っぽさ
すばやい（3・194：3・339）→すばやさ
すばらしい（3・134）→すばらしさ
正しい（3・101）→正しさ
手荒い（3・345）→手荒さ
手ぬるい（3・347：3・368）→手ぬるさ
とげとげしい（3・368）→とげとげしさ
生あたたかい（3・515）→生あたたかさ
望ましい（3・3012）→望ましさ
激しい（3・14）→激しさ
ひどい（3・14）→ひどさ
みにくい（3・502）→みにくさ
目覚ましい（3・132）→目覚ましさ
〜〜〜〜〜その他〜〜〜〜〜

I類：体言性、用言性のいずれの派生語も形成しないもの。
あられもない（3・133）；いけない（3・133）；おっかない(―――)；こっ

ぴどい（———）；さとい（3・300：3・304）；四角い（———）；酸(す)い（3・505）；そぐわない（3・133）；手厚い（3・368）；手痛い（3・14）；手広い（3・1920）；生やさしい（3・123）；またとない（———）；めぼしい（3・100）

以上、G、H、Iの3類を通しても、いくつかの特徴が見いだされる。

G類に属する語はあまり多くないが、そのうち、「熱い」「ぬるい」の2語を除いて、他はすべて「語彙表」の3・1（抽象的関係）に含まれる。しかもそれらは、空間的、時間的概念を示すものに限られる。それゆえ、これらの形容詞は、表現主体の主観や感情の介入することが多い「——み」や「——げ」などの派生形を必要としないのであろう。

H—4に属すると思われる語は、ここに掲げたものの他にもなお60語ほど選ぶことができる。また、H類の語は、「語彙表」の分類に照しても、その分野を特定することがむずかしい。ただ、他の類に比べて、(精神・行為）に関するものが少ないことは指摘できる。それは、この類に「おびただしい」「きわどい」「激しい」「ひどい」など、物事の程度を表すもの、「すばらしい」「正しい」「望ましい」のように、対象に対する表現主体の評価を表すものなどが多く含まれているためであろう。これらの語はいずれにしても、物事の状態や人間の内面などを直接に表現するものではないからである。

また、H類の語の中には、「荒い」「正しい」「淡い」のように、使用頻度の高い基本的な語も含まれているが、それらは比較的少数で、多いのは、「手荒い」「手ぬるい」「生あたたかい」のように接辞を伴っているもの、もしくは、「望ましい」「目覚ましい」のように、他の品詞から転成したと思われるものである。また、「甘ったるい」「荒っぽい」なども、それぞれ形容詞「甘い」「荒い」からの転成と見るべきであろう。これらの語はそれ自体一種の派生語であるから、さらに他の派生形を形成することが少ないのであろうか。

I類の語は、「あられもない姿」「手厚い看護」「手広く仕事をする」「またとない機会」のように、修飾機能をその主要な任務とするものが多く、文の陳述にあずかることの少ないものである。まれに、「いけない」のように陳述を表すものがあっても、それは事の可否を言い定めるだけで、物事の性状にはかかわらない。

（いくつかの考察）

以上のような分類を通して、いくつかの事がらに気づく。途中に狭んだ見解と多少重複する嫌いもあるが、それを5項目に分けて考察してみたい。

(1)　本稿では、体言性の派生語をどのように形成するかによって、形容詞をA～Iの9種に分けてみたのであるが、その中で、所属する語をもっとも多くかかえているのは、F類とH類である。特に「――さ」「――げ」「――がる」の3つの形を形成するF－3、「――さ」「――げ」の形を形成するF－4、「――さ」の形のみ形成するH－4の3つで、全形容詞の大多数を占める。それは次のような理由に基づくのであろう。

まず、「――さ」という派生形は、品詞の機能を形容詞から名詞に変換するだけで、表現主体の感情や感覚など、主観的なものの介入することがもっとも少ないものである。それゆえ、ほとんどすべての形容詞がこの派生形をとることができるのである。また、「――げ」の形は、対象がその状態にあるものとして、表現主体に感得されたことを表すもので、「――さ」の場合ほどニュートラルではないが、抽象的、概念的な意味を表すものを除けば、多くの形容詞はこの派生形をとる可能性を有するのである。さらに「――がる」の形も、対象の心情などを客観的に表現する場合には欠かせないものである。「彼の寂しさ」は、彼が寂しいこと、であり、「彼は寂しげだ」は、彼が寂しい気持でいると私には思われる、ということであり、それを確信的に言ったのが、「彼は寂しがっている」ということであろう。言い換えれば、この3つの派生形を生む基盤は、語法的な要因にあると思われるのである。

ただし、「――がる」の形を形成するか否かについての判断には、微妙なものがある。たとえば、「恐ろしい」「恋しい」「憎らしい」のように心情を直接に表す語の場合は、上記のように、対象の心情内容を表現主体が言い定めるのにこの派生形は欠かせないが、「勇ましい」「騒々しい」「尊い」のように、主として対象の性状や、対象に関する評価などを表す語の場合は、果して「勇ましがる」「騒々しがる」「尊がる」のような形が認められるかどうか、人によって異論もあろう。また、本稿ではF－4に分類したものの中でも、「はかない」「誇らしい」のように、心情にかかわる語については、場合によって「はかながる」「誇らしがる」の形も認められるかもしれない。

(2)　これに対して、「――み」「――め」の派生形を形成する形容詞は、その表す意味内容の点でかなり限定されるようである。それは、「――さ」「――み」

のみを形成するE類、「——さ」「——め」のみを形成するG類に属する語が少数であることによっても裏付けられる。すなわち、E類に属するのは、「青い」「赤い」など、ものの色彩、形状に関する数語のみであり、またG類に属するものも、「薄い」「熱い」「大きい」「近い」など、ものの形状や感覚などを比較的に表す10数語であって、「——さ」「——げ」を形成するF類の語数の多いのと対照的である。もちろん、A類、B類などに属する語も「——み」「——め」の形は形成するから、その範囲はもっと広がるが、それでも、形容詞全体から見てかなり限られた数でしかない。その理由は何か。

それは、「——み」「——め」の形をとる派生語が、主としてものごとの性状や程度に対する感覚的、主観的なとらえ方を表すということに求められよう。「広めに窓を開ける」のは、広く開けることではなく、やや広いと感じられる程度に、ということであり、「辛めに味をつける」のは、標準よりやや辛いと思われるくらいに、ということである。また、「——み」でいえば、「高みの見物」の「高み」は、必ずしも空間的に高い場所を意味せず、むしろ、対象から適当な距離を置いて、対象の状況の動きがよく見わたせる位置、というほどの意味である。あるいは、「深みにはまる」の「深み」は、他よりも深いと感じられる箇所、あるいは、程度のはなはだしいと思われる状態、の意味である。従って、「10メートルの高みから飛び降りた」「50メートルの深みにもぐる」のように言うことは普通にはない。客観的、数量的なものの表現には「——み」の形はなじまないのである。

「甘さ」と「甘み」はかなり共通して使われるようであるが、〈砂糖の甘さは果物の甘さの10倍〉のように使われるときは、甘さそのものを客観的に比較したものである。一方、〈この汁粉は甘みが足りない〉〈日が経つと果物の甘みが増す〉などというときの「甘み」は、汁粉や果物が甘くあるべきことを前提として、それらの甘く感じられる程度を問題にしているのである。「甘い」が味覚以外に比喩的に使われる場合、例えば〈母親の甘さが子どもをスポイルする〉と言って、〈母親の甘み〉と言わないのも、「甘み」が本来感覚的なものを表す体言形であることを裏づけるであろう。

「——み」の形は、一般にそうした主観的、感覚的な程度や性状を表すから、この形を形成するA類やB類、さらにC類、E類の形容詞には、「痛い」「惜しい」「悲しい」など、感覚や感情の表出をつかさどる語が多い。中に「白い」「赤い」「高い」「深い」のように、対象の属性や状況を客観的に表現する語もあるが、これらにしても、「——み」の形は、〈赤みがかった表皮〉とか〈青み

を帯びた空の色〉のように、色彩や色調が感覚的にとらえられる場合に限って用いられるのであって、交通信号や稲荷の鳥居の色をさすときには用いられない。ただ、「痛い」の場合は、「激しい痛さ」とも「激しい痛み」とも言うようで、「――さ」「――み」がもっとも近接している例と考えられる。それは、「痛い」が肉体的な意味でも心理的な意味でも〈苦痛〉の表現と受けとられ、属性と感覚の違いがはっきり意識されないためであろうか。ただし、これも心理面に使うときは〈胸の痛み〉のように言うのが普通であろう。

さらに、対義的な2つの語の一方に「――み」の形が用いられて、他方に用いられないものがある。「明るみ」があって「暗み」がなく、「面白み」があって「つまらなみ」がなく、「温み」があって「冷たみ」がない、というようなのがそれである。また、「重み」に対する「軽み」は現在特定の分野以外には使われないので、これも同様な例と考えられよう。こうして見ると、一般にネガティヴな感覚を表す言葉には「――み」の形が使われにくいようである。というのも、「――み」が表すのが客観的にとらえられる冷暖や軽重ではなく、主観的、感覚的なものであるからであろう。例えば、ある人物を評して、「温みのある人」とか「重みの感じられる人柄」のように言うのは、その対象から客観的なものの他に、プラス・アルファというべき温和さや威圧感が伝わってくる、ということである。ところが、「冷たい」「軽い」の場合は、そのように積極的に伝わるものがない。従って、「冷たい」「軽い」「つまらない」などは「――み」の形に縁遠いのだと思われる。

(3) A類、B類に属する語は、もっとも多くの派生形を形成するものであって、これらは当然のことながら、日常的に使用頻度の高い基礎的な語、多義的な語が多い。中でもA類には、「ゆるい」「深い」「重い」「強い」など、抽象的概念を表す語が多いのに、B類には、「痛い」「美味い」「かゆい」など感覚を表す語や、「寂しい」「悲しい」「楽しい」など、心情表出の語の多いことは目立つ現象である。両者の差は、ものの程度を示す「――め」の形を形成するか否かにあるのであるから、その所属する語にこういう違いが出るのも当然であろう。なお、A類にも「甘い」「からい」という本来感覚の表出をつかさどる語が含まれているが、これらが「――め」の形で用いられるのは、塩分の濃淡、態度や姿勢の緩厳などを比較的に言い表す場合に限定されるものと思われる。

(4) 形容詞のうち、語基の複合によって生じた語、接辞を伴ってできた語(併せて複合語と呼ぶ)は、A類～E類の語の中には見られず、F類、H類の中に多く含まれている。また、複合語は、複合する前のもとの単独語と同じ類に属

することが少ない。例えば、「深い」はA－2に分類されるが、「なさけ深い」「罪深い」などはF－4に分類される。「高い」はC－2に分類されるが「うず高い」はH－4に分類される。「悲しい」はB－1に、「寂しい」はB－3にそれぞれ分類されるが、「もの悲しい」「もの寂しい」は共にF－4に分類されるのである。中には、「荒い」がH－3に、「手荒い」がH－4に分類されるように分類項目の近接している例もあるが、それはむしろ少数である。このことは、形容詞の派生語の形成ということが、語の意味内容によるとともに、それぞれの語の使用範囲の広狭（たとえば、多義語であるか単義語であるか、など）や、機能性の高低（たとえば、比喩的に使われるか否か、など）によって規定されることを物語っていると思われる。もちろん、派生形を多く有する語ほど、使用範囲は広く、機能性も高い。

形容詞の中には、動詞から転成したと思われるものがあるが、そのような転成語の存在を本稿の分類の中に求めると、「――さ」「――げ」型のF類にかなり集中しているのが認められる。「恥かしい」（F－1）、「勇ましい」「いまわしい」「恐ろしい」「恋しい」「疑わしい」（以上F－3）、「輝かしい」「騒がしい」「むつまじい」（以上F－4）などである。H類にも「めでたい」（H－3）、「望ましい」「目覚ましい」（H－4）などがあるが、F類に比べて少ない。また、その他の類には、この種の語は見いだされないようである。

その理由は次のように考えられる。これらの転成語は、もとの動詞が表していた行動、動作を様態的に変えて表現したものである。従って、それらは、抽象概念や自然現象を表すものよりも、ものごとの性状や心情を具体的に表すものが多い。一方、「――げ」「――がる」は、話者が対象の表情や言行から、その内面などを推測している意の派生形である。それゆえ、それは主に人間の性状や心情にかかわる。こうして動詞から転じた形容詞は、F類（「――さ」「――げ」型）に多く見られることになるのである。

(5)　ここで、対義語の分類状況について考察してみたい。対義語は相互に用法や機能が似ているので、本稿での分類でも同じ項目に分類されそうに思われる。が、実際には先に「――み」形の可否で見たように、そこにかなりずれが見られるのである。

対義語の中には、相互に同じ項目、近接した項目に属する例もある。「甘い」と「からい」が共にA－4に、「広い」と「狭い」が共にD－2に分類されているのは同一項目所属の例であり、「強い」がA－1、「弱い」がA－2に、「重い」がA－3、「軽い」がA－4に分類されるのは近接の例である。その一方で、「深い」

がA－2に、「浅い」がA－4に分類される例、「美味(うま)い」がB－3に、「まずい」がF－4に、「明るい」がC－2に、「暗い」がH－4に分類される例、「新しい」がB－3に、「古い」がH－4に所属すると思われる例などは、相互に分類項目を異にする例と考えられる。

これらの語例から推測すると、対義語のうち、積極的な意味内容のものが、多くの派生語を形成し、消極的な性格のものは形成する派生語が少ないと言えそうである。それは、恐らく、積極的な語のほうが、使用の幅が広いことを示すものであろう。そのことは、これら対義語の対比性を除いてニュートラルな言い方にするときは、積極的なほうで代表されることにも現れている。〈明るさが足りない〉〈深さ10センチの水たまり〉などと言うのがそれである。しかし、前記の「甘辛」「広狭」に見られるように、同じ程度に派生語を形成するものもある。その違いがどこにあるかは突きとめるに至っていない。

(おわりに)

これまでの考察を要約すると、形容詞は、派生語形成の可否によって何段階かに分類することができるが、その所属を決めるのは、個々の語のもつ機能の多寡や使用の幅の広狭などである、という、まことに常識的な結論に落ち着く。実は本稿の当初のねらいは、この考察を日本語の形容詞の表現力や表現性と結びつけて論じることにあったのであるが、私の不勉強と怠慢からきわめて浅い考察に終ったのはお恥かしい次第である。ただ、ほんの思いつきの域を出ないものではあるが、こういう角度から日本語の問題を扱うこともできるのではないか、ということを、厚顔のそしりをもかえりみずに提起してみた。日本語に関心を持つ方に何らか参考になれば幸いである。

なお本稿では、いわゆる形容動詞(ナ系の形容詞)は考察の対象としなかった。それは、時間や紙幅のつごうもあったが、ナ系の語は、イ系の形容詞に比べて、一般に派生語を形成する力が貧弱だと思われるからでもある。

(注1) 森岡健二「日本文法体系論」(11)〈「月刊文法」昭和44年10月所収〉
(注2) 小山敦子「〈の〉〈が〉〈は〉の使い分けについて」〈「国語学」1966年9月所収〉
(注3) 林四郎『文学探求の言語学』